

経営と健康

最終回

栄光と悲劇の偉人「西郷隆盛」

講談師 一龍斎貞花

明治維新は、産業振興による経済発展。一方、富国強兵から軍国主義へ。経済と戦勝で世界の仲間入りしたのは間違いないが、近代国家、近代社会と、もてはやされる反面、功罪半ばという見方もされている。

一年半の西欧視察から帰国した大久保利通は、機械が動き、物を造り出す技術、文明に驚き、何もかも西洋式にと。利通の洋服姿を見て西郷は、「醜態だ」と、西洋かぶれを心配します。「富国強兵、身分にとられず農民からも力のある者で、国の軍隊を作るべし」という大久保に対し西郷は、「武士はどうなる。ならば隊長は旧士族に」

「そんなことを言ってる時代じゃない」という対立もありました。

日清戦争勝利によって、年間予算の一・五倍の賠償金を得て戦争は儲かる。

更に手柄を立てれば華族になれる。これは軽輩出身者には魅力的でした。これは後のことですが維新の大きな動き。

南洲翁遺訓に

「万民の上に立つ者は、己を慎み品行を正しく、贅沢を戒め節約に努め、人民の標準となるべし。しかし邸宅を構え、高い衣服を着、愛妾を抱え役得から私腹を肥やすとは何事、戊辰の戦死者に申し訳なし」

若い時から貧しい農民に寄り添った気持ち、偉くなっても失っていない西郷さんです。政府高官になっても普段は筒袖、兵児帯下駄ばき姿。維新後も農業こそ国家の基礎であると説いた。

征韓論から決裂

「旧士族のために征韓を」

「侵略はいけない」

岩倉具視、大久保は、「富国強兵、内政優先」を断固として主張し、西郷の征韓論に反対。

征韓論に敗れた西郷は、憤然として辞表提出。征韓派の副島種臣、江藤新平、板垣退助、後藤象二郎等参議辞任。桐野利秋、篠原国幹、村田新八も鹿児島へ。この間大久保は表へ出ず、片付いたあと参議になり、首相にはならなかったが自分の内閣を作っている。

兄弟同様だった西郷と大久保は、完全に袂を分かったのでございました。パン

西郷を慕う若者達のために、士族として最高の永世二千石を寄付して私学校を建て日夜訓練に励みます。

佐賀の乱、熊本神風連の乱、秋月の乱、萩の乱と旧士族の反乱が続く、鹿

児島が呼応すれば一大事、鹿児島がいつ反乱を起こしてもおかしくない。

天皇制国家トップの大久保、木戸孝允対西郷の不和。官僚派対武闘派の対立とも言えます。パンパン

大久保は、薩摩人だけに薩摩人の心がわかります。明治十年一月三十日、西郷の行動を調べんものと、

「反政府の疑いあり」と、警察官を差し向け私学校の探索。これには生徒らが、

「西郷先生、暗殺の密使だ」

と激怒し、政府の火薬庫と造船所を占領。西郷は勿論、主戦論の桐野利秋まで必死に止めるも、もう止まるものはありません。パンパン

「遂に西郷先生が立たれた」という噂が次から次へ。

「先生と共に死のう」
「そうだ先生のために死のう」

西南戦争勃発

若者たちの血気に遂に、明治十年二月十五日西郷は決意し、一万五千の兵を率いて出陣、かくして西南戦争勃発。薩摩隼人を中心に集まった生徒たち、雪を蹴立てて大進撃。パパン。パパン。西郷決起の報に各地から続々と馳せ参じ、熊本城を取り囲んだその数三万に膨れ上がっております。パン
総攻撃をかけるも、城を守る谷干城は頑強に防戦。

大久保は、ただちに救援部隊編成。総督有栖川宮熾仁親王、陸軍山県有朋、海軍川村純義のもと、野津鎮雄、野津道貫、高島鞆之助、黒田清隆、川路利良、大山巖。有栖川、山県を除き薩摩人。大山は甥、山県出陣のあと、陸軍卿代理が西郷従道。熊本城を守る谷は土佐、参謀長はかつての同志樺山三三郎。守るも攻めるも師弟、先輩、後輩、そして骨肉を越えての戦い。パパン
政府軍は、西郷軍の囲みを破って熊本城内の将兵を救おうとした。これを阻止せんものと田原坂に防衛線。道幅約4メートル、一の坂、二の坂、三の

坂、一・五キロの曲がりくねった坂道。大砲を曳いて通れるのはこの道だけ。ここを突破しなければいけない。西郷軍にとつてもここを破られれば生死を決する道と、両軍にとつて戦略上の重要地点。

三月初旬から十八昼夜に亘って戦いを繰り返す。両軍合わせて三百五十名余り討ち死。
雨は降る降る人馬は濡れる。越すに越されぬ田原坂も、三月十七日政府軍の手に落ちたのでございました。熊本城攻め五十日、遂に転進せざるを得ません。

奄美大島の妻愛加那との間に生まれた菊次郎も参戦。右足切断の重傷を負いながら、後に京都二代目市長に就任。延岡、宮崎、人吉、都城を経て鹿児島へと向かったが、帰る先の鹿児島も疾うに政府軍に占領されておりました。
征韓を侵略とは考えず、日本の活路を考えての西郷の展望に不備があり、上野の彰義隊攻めには、大村益次郎の近代的戦術に完全に手柄を奪われ、今度は大久保、木戸等のために辞任し、今まさに戦いにも利あらず。西郷王国鹿児島には、六万の政府軍が満ちあふれ

西郷来たれと待ち受けておりました。明治十年九月二十四日、ダダーン、弾丸が西郷の腹と股を貫き、歩くこと叶わず、
「晋どん、ここらでもうよか」

天皇のおわす東の方を押し、首差しのべ小刀を腹に突き立てる。別府晋介の大刀一閃、首は前へと落ちた。
毛せんに包み埋めたと、誰かが持ち去り行方不明とも言われています。西郷は、包圍網を脱出して軍艦に乗り、ウラジオストックに上陸しロシア兵の訓練をしたという説も。ジンギスカンになったという源義経同様、人気者ならでは逸話と申せましょう。

西郷五十一歳の生涯。維新の功労者がなぜ逆賊となつて果てねばならなかったのか。新しい時代を読み取るこゝろが出来なかつたのか。
もし西郷が外国を視察していたら西郷の気持ちは変わったのか、それとも変わらなかつたか。兄と敵対した弟従

道も外国を視察しています。

西郷の死から二年後、勝海舟は、西郷の死を悼む記念碑をひそかに建立。二人の絆を伝える記念碑が大田区洗足池の海舟の墓近くに建てられています。
東京の恩人として、東京都が命日に墓前祭を行っているのは、海舟と松平定信（七分積金）の二人だけ。

西郷は、大赦によって逆賊の汚名は外されましたが、靖国神社には祀られていません。

西郷墓地には、西郷さんを尊敬する人たちによつて毎日掃き清められ、新しいお花が供えられ、多くの人が手を合せています。しかし、かつての友で後年袂を分かつた大久保利通の東京青山墓地のお墓にお参りする人はわずかです。

日本人に愛され続ける西郷隆盛。これをもつて読み終わりと致します。パパン

